

挨拶

金 原 淳

空電は、対流圏内に源を有する強力な雑音電波であるから、無線通信の創業と共に注意されたことであつたが、研究が盛になつたのは、1927年ワシントンにURSI (Union Radio Scientifique Internationale) 会議が開かれて後のことである。各國が協力して研究に當つた爲かと思はれる。

本邦では、此の前後から、逓信省工務局が中心となつて研究に當り、当時の本邦内外地に散在する受信所を用ひて、数年間に亘り、空電の方位測定を継続した。その結果、活発な氣象現象と密接な關係を有することが、量的に明かになつた。

昭和12年からは、英國の國立研究所や佛國の中央氣象台と密接に協力する様になつて、研究が促進されたが、第二次大戦と共に關係は中絶した。昭和15年日本學術振興会内に雷災防止委員会が設立せられるに及び、本邦内の氣象、発送電、高圧、無線等各方面の専門家の協同研究が行はれたので、空電の研究は、躍進的な發展を遂げた。戦時中は陸海軍の氣象部隊にも利用され、欧米、一流國とも比肩し得る程度に進んだ。

終戦と共に到來した米國空軍氣象隊が本研究を重要視して、應援してくれたことと、大学及文部省当局がその必要を認めたことが相援けて、戦後の匹迫時代にも拘らず、一部門宛認められ、昭和24年6月1日、遂に研究所の官制制定を見るに至つたのである。

その間、創業に當つた学長、事務当局、所員一同の苦心は並々ならぬものがあり、今日その緒についたことを、一同深く感謝し合つてゐる次第であるが、又実に感慨の盡きないものがある。

当所が公式に認められたのは、昭和24年であるが、名古屋大学に於ける空電研究は昭和15年創立以來のことで、戦争中にも活動を続け、昭和18年には東山の敷地内へ空電観測所が建設されて、学内でも空電の観測が出来る様になつた。

本報告には、昭和15年以來の研究も発表し、名古屋大学が今日迄行つた空電研究の全望を知つていただくこととした。

今後は空電の他に太陽雑音その他の雑音研究にも進み、他方、無線通信に対する妨害除去の研究も行つて、理学、工学両面から御指導と御應援をいただき度いと思ふ。

本報告の創刊号発刊に當り、学長始め医学部長、理学部長及工学部長から御懇篤な所感並に祝辞を賜り、又初代総長澁沢元治先生からも御感想の一端をいただいた。研究所のこの上ない名誉である。私達一同は、益々研究に精進し、卷を重ねるにつれて立派な業績を発表し、以て今日の御好意に報いる覚悟である。 (昭和24年6月)